



Title	第5回 ウィリアム・モリス研究会
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 2021, 78, p. 44-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

第5回 ウィリアム・モリス研究会

2020年12月19日（土）13:00～15:40 オンライン研究会

主催：意匠学会

発表者・タイトル

江澤美月

『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』とラファエル前派：「ラスキンとクォーターリー・レビュー」に注目して

藤田治彦

ウィリアム・モリスの壁紙《アカンサス》：ジェイムズ・ページ『アカンサス素描ガイド』との比較

吉村典子

戦後英国美術におけるモリス解釈 ― 〈これが明日だ〉展を例に

第5回ウィリアム・モリス研究会は、新型コロナウイルス感染時期の2020年の年末に、意匠学会本部事務局多田羅景太氏のオンライン開催準備と、意匠学会委員吉村典子氏のオンライン調整で12月19日午後に開催された。一橋大学の江澤美月氏、大阪大学・神戸芸術工科大学の藤田治彦氏、宮城学院女子大学の吉村典子氏が発表、関東・関西の諸大学の会員など20数名がオンラインで参加し、発表後、興味深い質疑応答が行われた。

江澤美月氏の発表『『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』とラファエル前派：「ラスキンとクォーターリー・レビュー」に注目して』は、1856年にウィリアム・モリスが出資し編集した *Oxford and Cambridge Magazine* の6月号に掲載された「ラスキンとクォーターリー・レビュー“*Ruskin and the Quarterly*”」を中心とした研究である。それは、モリスとオックスフォード大学（エクセター）同級生で親友のエドワード・バーン＝ジョーンズとの共同、あるいはバーン＝ジョーンズの執筆とされる。

“*Ruskin and the Quarterly*”の内容については、同年3月の『クォーターリー・レビュー *Quarterly Review*』誌に掲載されたエリザベス・イーストレーク (Elizabeth Eastlake) によるジョン・ラスキン (John Ruskin) の『近代画家論 *Modern Painters*』の書評に関するもので、ラスキンを宗教改革者ルターになぞらえ、美術界のルターとして称賛していることが指摘されるものの、ラファエル前派との関連で論じられることは少ないようである。以上を踏まえ、江澤氏の発表では、『オックスフォード・アンド・ケンブリッジ・マガジン』に掲載されたこの作品が、ラスキンのラファエル前派論を擁護するものであり、その後のラファエル前派（実際には解散以後のラファエル前派）としてのモリスの評価を準備するものであることを考察した。

藤田治彦氏の発表「ウィリアム・モリスの壁紙《アカンサス》：ジェイムズ・ページ『アカンサス素描ガイド』との比較」は、モリスの壁紙《アカンサス》と、ページ (James Page) の著書『アカンサス素描ガイド *Guide for Drawing the Acanthus, and Every Description of Ornamental Foliage*』との比較研究である。モリスの壁紙や染織は、官立デザイン学校教員の平面的デザインとは異なり、立体性や奥行きを感じ

じさせる作品が含まれるが、1874年に下絵制作、1875年に壁紙印刷の《アカンサス》がもっとも特徴的で、ページの『アカンサス素描ガイド』（1839/40年出版、1843年、1886年再刊）の影響を感じさせる。

ペイジは、官立デザイン学校（Government School of Design）創設の翌年1838年に対抗開設された実践デザイン振興会（Society for Promoting Practical Design）またはデザイン芸術振興会（Society for Promoting the Arts of Design）で教え、この振興会学校の閉鎖後は自ら開設した小規模校で教えたとされる。デザイン振興会開設に関与したひとりが、後にナショナル・ギャラリー館長になるチャールズ・ロック・イーストレーク（Charles Lock Eastlake）に絵画を教えた画家、ベンジャミン・ロバート・ヘイドン（Benjamin Robert Haydon）であった。江澤美月氏はヘイドンや、チャールズの妻、エリザベス・イーストレークにも注目しており、研究テーマや注目は異なるが、遠隔ではなく対面のモリス研究会が再び開催されるようになれば、さらに興味深い質疑応答や懇談会も可能になるだろう。

吉村典子氏の発表「戦後英国美術におけるモリス解釈——〈これが明日だ〉展を例に」は、1956年ロンドンで開催された〈これが明日だ〉展の趣旨等に散見される「モリス」および「コラボレーション」という語をとおして、1950年代のモリス解釈を考察する研究である。

この展覧会は「ポップ・アートの幕開け」として今日まで語られているが、実際は「建築家、画家、彫刻家のコラボレーション」が企画当初からあり、その結果、12のコラボレーションワークが展示された。この「コラボレーション」の議論の中で、ウィリアム・モリスの名および彼の時代の中世主義思想が引き合いに出されていた。コラボレーションの思想のはじまりをモリスにおき、「そこではエゴを抑制し、共通の目的のもと制作に取り組む覚悟があった」と解釈し、〈これが明日だ〉展では、それを「相反するものどうしのコラボレーションという考えに置き換え」、「統一性」ではなく、違う領域の者がかかわることによる「多様性と複雑性」の表れをむしろ評価したのである。

上述の思想を読み取ることができる〈これが明日だ〉展図録の序文等の資料が、モリス研究会で示された。そのなかでレイナー・バーナム（Reyner Banham, 1922-1988）によるものは、多様な領域の内容を含むものであるだけに、研究会参加者それぞれの専門の立場から貴重な情報や意見が寄せられ、有意義な質疑応答の時間となった。

吉村氏の発表に含まれる「コラボレーション」も、江澤氏の広義の「ラファエル前派」や藤田氏の官立デザイン学校に対する「実践デザイン振興会」に関係するところがあるように思われる。オンライン研究会もZoom使用で興味深い質疑応答が行われたが、対面になれば、各発表者への質疑だけではなく、すべての発表の比較（ある意味で19世紀20世紀を超えた関連比較検討）も可能になると思われる。現在の状況を生かし、乗り越えることができれば、意匠学会はじめ多くの学会にとって、ある意味でいい経験の時代になるだろう。